

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

言い逆らいの徴

――ルカ伝第2章22～35節――

1992年12月20日

小池辰雄

イザヤ書35章を成就されたキリスト マリアの讃歌 私たちがキリストの徴とされる 言い逆らいの徴 大変なかつ キリストの喜びの溢れている所 (詩)「教会には理解されず」 歡喜のあぶら 集会は解散、あとで新しく申し込むように

【ルカ1】

26 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28 御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32 彼は大人らん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35 御使こたえて言う『聖靈なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

……

46 マリヤ言う『わが心、主を崇め、47 わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。49 全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖なり。50 その憐憫は代々、畏み恐るる者に臨むなり。51 神は御腕にて、権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散らし、52 権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うし、53 飢えたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ



給う。54 また我らの先祖に告げ給いし如く、55 アブラハムと、その裔すえとに対する憐憫あわれみを、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』

【ルカ2】

3 さて人みな戸籍に著かんとて、各自おのおのその故郷に帰る。4 ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5 既に孕はらめる許嫁いみなすけの妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所に到りぬ。6 此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7 初子ういじをうみ之を布に包みて馬槽うまぶねに臥ふせたり。旅舎はたしやにおける所なかりし故なり。

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚いたく懼おそる。10 御使みつかいかれらに言う『懼

るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信おとずれを我なんじらに告ぐ、

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主すくぬしうまれ給えり、これ主キリストなり。

12 なんじら布にて包まれ、馬槽うまぶねに臥ふしおる嬰兒みどりごを見ん、是その徴しるしなり』13 忽たちま

ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』15 御使等さりて天

に往きしとき、牧者むつしかいたがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給

いし起みどりごこれる事を見ん』16 乃すなわち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽うまぶねに臥ふ

たる嬰兒みどりごとに尋ねあう。17 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げ

たれば、18 聞く者はみな牧者むつしかいの語りしことを怪しみたり。19 而してマリヤは

凡て此等のことを心に留めて思い回せり。20 牧者は御使の語りしごとく凡て

の事を見聞みききせしによりて、神を崇あがめ、かつ讚美しつつ帰れり。……

25 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにしてイ

スラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在います。26 また聖霊に主

のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、27 此のとき、御霊に感

じて宮に入る。両親ふたおやその子イエスを携え、この子のために律法の慣例ならわしに遵したがい

て行わんとて来りたれば、28 シメオン、イエスを取りいだき、神を讚ほめて言う、

29 『主よ、今こそ御言みことばに循したがいて僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。30 わが目は、

はや主の救すくいを見たり。31 是もろもろの民の備え給いし者、32 異邦人を照らす光、

御民イスラエルの栄光なり』33 かく幼児おむなに就きて語ることを、其の父母あや

しみ居たれば、34 シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、

イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる

徴のために置かる。35 ——劍やいばなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの

人の心の念おもの顯あらわれん為なり』……

49 イエス言いたもう『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを



知らぬか。』

●イザヤ書35章を成就されたキリスト

今日は「言い逆らいの徴」という題でお話します。いつか、

「35／53」（53分の35）

という数字を書きました。「53」はイザヤ書53章、「35」はイザヤ書35章です。もうこの二つで、キリストが全部預言されている。大変なイザヤ書です。53章は贖罪のキリスト、35章は地上でイザヤ書35章の現実を展開していったキリストです。イエスは天国を現しながら歩いていらつしやつた。なぜ、「言い逆らい」なのか分からない。これだけのひとは他にいません。イザヤ書35章というのは素晴らしいところです。これをキリストは現実になさつた。

「1 荒野とうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかがやかん。

2 盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄をえ、カルメルおよびシヤロンの美しきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、これらの神のうるわしきを見るべし。

キリストはこのことをなさつた。

3 なんじら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ。

4 心さわがしきものに対していえ。なんじら雄々しかれ懼るるなかれ。なんじらの神をみよ、刑罰きたり神の報きたらん。神きたりてなんじらを救いたもうべし。

5 そのとき聾者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし。

全部、これはキリストがなさつた。

6 そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、啞者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり。

7 やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。

8 かしこに大路あり、そのみちは聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることあたわず、ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。

9 かしこに獅おらず、あらし獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われた者のみそこを歩まん。

10 エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシオンにきたり、その首とは逃げざるべし」（イザヤ35・1～10）



最後の句は素晴らしい。旧約の預言を完全に成就されたのはイエス・キリストです。大変なかたです、キリスト様というのは。言いようがないです。

それから、マタイ伝1章に、

『視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えられん』(マ

タイ1・23)

という言葉もある。「インマヌエル」とは、「神われらと共に」というイザヤ書の言葉です。ヘブライ語では、「エル」は「神」、「マヌー」は「我ら」、「イン」は「共に」です。

「イエス」という名前は、ギリシア語では「イエスース」と言う。ヘブライ語では「イエホシュアッハ」です。ヘブライ語の原語というのはみな三つの子音から成り立っているのですが、「ヤーシアッハ」という字は「救う」という字です。だから、「イエホシュアッハ」というのはもともと「救主」「セイビヤー」といういう意味です。「イエスース」はヘブライ語の「イエホシュアッハ」にあたるので、「イエスース」というのは「救主」という意味なんです。

●マリアの讃歌

それでは、ルカ伝の1、2章のところにいきましましょう。ルカ伝の始めの方はイエスを迎える一番素晴らしいところで、ここはあきないです。

「26その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32彼は大ならん、至高者の子と称えられん。』

「至高者」とはヘブライ語で「エリヨーン」という。

また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37それ神の言には能わぬ所なし』38マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。』(ルカ1・26～38)



「マリアの讃歌」「マグニファイカート」という不思議なのがある。

「46 マリヤ言う『わが心、主を崇め、47 わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。49 全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖なり。50 その憐憫は代々、畏み恐るる者に臨むなり。51 神は御腕にて、権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散らし、52 権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うし、53 飢えたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。54 また我らの先祖に告げ給いし如く、55 アブラハムと、その裔とに対する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』」(ルカ1・46～55)

「マリアの讃歌」というのはそれ自身が預言みたいな言葉です。不思議なことをマリアが言っている。言い逆らいの徴の内容みたいなのです。

● 私たちがキリストの徴とされる

「3 さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4 ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5 既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所に到りぬ。」

「ベーツレヘム」というのはもともとヘブライ語で「パンの家」という意味です。

6 此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7 初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥せたり。旅舎における所なかりし故なり。

他に旅籠屋がないものだから、馬槽の中に臥せた。最低の生まれ方をなさった。

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、羊飼いに由く天界から現れる。

9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、

直訳すると、「大歡喜を音信せん」というような言い方です。

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』(ルカ2:3～12)

分からないです、この嬰兒は。これを「徴」だなんていつてもね。ギリシア語で「セイメイオン」という字です。ヘブライ語では「オーツ」といいます。

「徴と不思議と能力ある業をもつて」



と、パウロがよく言うときに、一番先にパウロは徴という言葉を使っている。

「自分の福音はそうなんだ。美しい言葉によつたのではない」

と。我々自身がまたキリストの徴にされるわけです。また、徴にならないければウソというわけです。キリスト者というのはキリストの徴です。

十字架によつて無を賜る。相対的な人間小池はしようがない者だ。けれども、その奥に絶対の境地がきている。私無きところの本当の無私の世界です。これが、十字架で与えられた無だ。与えられた無ですよ。

「無となりました」

なんて、冗談じゃない。無と成れっこない。与えられた無です。そこに聖霊が来た。「十字架・聖霊」とはそういうこと、根源現実です。これは本当です、誰が何と言おうと。これが、

「私たちがキリストの徴とされる」

ということ。どこまでも、絶対の恩寵の受け身です。絶対恩寵の受け身の世界です。だから、ありがたい。

「こつち側の信仰がどうか」

なんて、そんなことではない。自分の信仰がたのみになるのなら、私はさつさつとキリスト教からぬけてしまう。そんなことではない。絶対恩寵の世界です。もう、あり難くてしようがない。平伏だけです。私たちが本当に、

「主さまー」

と全存在で無言の叫びをする。キリストの中に、叫びとともに自分を投身するわけです。からだを投げ入れる。祈り入る。祈り入る。キリストの中に入らなければ、どうにもならない。投げ入れる。十字架という門があるから、この門を通して平伏して入る。これが十字架・聖霊の世界です。これは、誰が何と言おうと、私は告白せざるを得ない。

● 言い逆らいの徴

「¹³ 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、¹⁴ 『いと高き

所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

「地には平安、主の悦び給う人に」

でいいんです。

「主の悦び給う人に来たれり」

ということ。神に現れ、人に現れた」ということがむしろ本当です。

「いと高き所には栄光、神に。」

地には平安、主の悦び給う人に来たれり、

と、「現に来た」ということを言っている。「あらんことを」ではない。それからの祈りとしては、出てきましようけれども。



いつも、平安が元で平和は後だということはお忘れにならないように。神さまとキリストと私たち一人ひとりの間の成り立ちを平安という。それから、人間同士の平和がくる。ところが、日本には普通は平安がない。民主主義なんていったって、

「神さまの下において」（アンダー・ゴッド）
ではないんだ。まあひとつ、福音のために大いに戦っていきましょう。遠慮は要らんです。我々自身が言い逆らいの徴になればいい。

15 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』¹⁶ 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。¹⁷ 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、¹⁸ 聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。¹⁹ 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。²⁰ 牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。」
(ルカ2・13～20)

そして、

「²⁵ 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。²⁶ また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷ 此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵いて行わんとて来りたれば、²⁸ シメオン、イエスを取りいだき、神を讚めて言う、²⁹ 『主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。³⁰ わが目は、はや主の救を見たり。³¹ 是もろもろの民の備え給いし者、³² 異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』」

もう全世界ということですね。

³³ かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴ シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。』

「受くる」という言葉はない。「言い逆らいの徴のために置かる」です。

³⁵ —— 剣なんじの心をも刺し貫くべし——
これは十字架の死のことを既に預言している。

これは多くの人の心の念の顕れん為なり』 (ルカ2・25～35)

● 大変なかた

マリヤは聖霊でもってイエスを産んだんでしょ。ところが、イエスの12才の時に、祭の慣例に従って上って行って、そして帰って行ったところが、さっぱりイエスがやって来な



い。「どうしたんだ？」と、またもとに戻った。この辺をみるというと、お母さんのマリヤはイエスの本質が読めていない。困ったもんだね。12才のキリストにとつて「父」というのは父なる神のことです。ヨセフのことなんか父と言ってやしない。もちろん、相対的な意味では父としては御存知ですけれども、しかし、キリストが本当に「父」と言う時には、父なる神の他にない。父、神、霊、父である。そこをマリヤはよく分かっていない。当然これは、坊さんたちと一席やっているとところだから、

「父の家にいるのが、あなた方は分からないのですか」

と、12才のキリストが言っているでしょ。

「何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか」(ルカ2・

49)

と、お父さんとお母さんにはつきり言った。これは、イエス自身が言い逆らいの徴そのものだ。この「居るべき」のギリシア語の「べき」は強いですから。

「居ないではいられないということをお存知ないのですか」

と。お母さんは全然分かっていない。聖霊で産んだくせに、マリヤは躓いたり転んだりしている。だから、12才のイエスは既に言い逆らいの徴そのものをもってぶつかつたんです。

「そうじゃありませんよ。私は天のお父さんの事でここに話をしているところです

よ。お分かりにならないのですか」

というわけだ。

「わが父の家に居るべきを知らぬか。なぜ、お尋ねになりますか」

と、はつきりやつつけられた。これが言い逆らいの徴です。

キリストは預言者の宗教を完全に満たしてしまった。預言者はたくさんいますから、預言者のたくさんの方々の言葉が全部、キリストに集中したわけです。これが満たしている。それを受けとつて全部満たして、もうそれは要らんというのが――「アウフヘーベン」というドイツ語がありますが――そうなんです。今までのものを満たして全部それは要らん、という。旧約を完全に乗り越えた。新約の福音の世界、キリストの福音の世界というのは桁が違う。イザヤ書35章を現じて歩いておられた。それに躓くものだから、これは困ったものだ。キリストは天国を現じて歩かれた。死人まで甦らせた。ナインの息子が棺桶の中に入っていたら、キリストはちよつと手をおいて、

「起きよー」

と言つたら、死人が甦つてきたでしょ。大変なことです。ルカ伝の終りの方をみると、復活のキリストが現れて、

「私は幽霊ではないよ、何か食べるものがあるか」

と。お魚があつたから、キリストは食べた。全部、本当です。我々の理性・感情・判断を乗り越えたもの凄い世界ですから。イエスさまは、もう正直、「大変なことです」と言うよりか



他に言いようがないです。だから私たちは、

「主さまー」

と一言、全存在を投げ入れれば、全部とけてしまう。前進あるのみ。「何だ、かんだ」ではない。あり難くてしようがない。

●集会は解散、あとで新しく申し込むように

どうぞ、皆さん、

「この東京召団、武蔵野幕屋にくと楽しくてしようがない。何と喜びの溢れた所ではないか。この集會に来ると、キリストの愛の光が、愛の喜びがあふれている。

何という召団だろう」

と、是非、将来はそうなっていたきたい。そうでなかったら、もう集會はよしませう。私はその決意でおります。新しい人が来たら、

「武蔵野はキリストの喜びの溢れている所だ。楽しくてしようがない。うれしくてしようがない、ここへ来てみたら」

と。そういう本当に喜びと愛のあふれた召団でなかったら、やめます。私はその悲願をもつてこれから臨みますから、皆さんも、同じ気持で進んでいただきたい。そういうキリストの愛の溢れた喜びの集會にならなかつたなら、集會をしたつてしようがない。そういうように是非なりませう。後で新しく申し込んでいただきます。その気合をもつて、

「私はいきます」

という方は申し込んでください、今年中に。私はそういう悲願をもつて来年から進みます。そういう集會でなかつたら、いつまでやつたつて、つまらないです、正直。私自身を乗り越えて進んでいきますから。そういう大悲願をもつて進みます。武蔵野はそういう幕屋なんだ、そういう集會なんだ。人々がくれば、

「何かしらんが、楽しくてしようがない」

と。そういう大悲願をもつて。それはできます、本当にキリストが生きてくれば。それでいきますよう。

「よし、私もそれで行きます」

という方は今年中に葉書で申し込んでください。私は――単なる決意ではない――上からの示しによつてはつきり申しあげます。それでなかつたら、もう、集會は解散する。

そういうことで、どうぞひとつ、本当にキリストの僕婢らしく進んで行きたいと思つております。賀川先生は、本当にそのような愛の人でした。我々は「キリスト」と言うならば、本当にキリストの徴にならなかつたら、これは偽りになる。どうせ、人間ですから、躓いたり転んだりもあるでしょう。いいですよ。前進またあるのみです。

どうぞ、そういう気持で本当に新しくいきますよう。私の今日のこの気合を、皆さんが



「そうだー！」

と言つてくださるなら――一遍、私はここを解散しますから――どうぞ今年中に葉書で新しく申し込んで頂きたい。そういう方々と私は進んでいきますから。

パウロもルッターも、「信仰のみ」と言つた彼らは本当に信行であつた。キリストを信ずるとは、キリストの信が入ってきて、そして、信、即、行の世界です。徴の世界。

「言い逆らいの徴」という。なぜ、キリストは言い逆らわれたか。死人まで甦らせ、民衆は片つ端から治してやり、天国を現じていたのに、なぜ、キリストは躓かれたか。イザヤ書の28章に「躓きの石」という言葉がありますが。全く、このような天国を現じた人になぜ躓いたか。最後には、民衆まで全部煽動されて――ユダヤ教の連中です――それで、キリストに逆らつてしまった。棄ててしまった。弟子まで散り散りになつてしまった。十字架の下に残つたのはわずかの女の方が幾人か。特に、七つの悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤなんてのはキリストにしがみついている。

そういう集会で参りましょう。必ずできます。私たちの自分の努力ではありません。キリストが本当にそこに生きてくださるなら、十字架が土台で聖霊がそこに臨んでいるならば。そういう集会で将来、是非ともいきたい。

「何か、ここに来ると、楽しくてしょうがない、明るくてしょうがない」と。是非ともそれでいきましょう。あなた方はできると私は信じています。

●(詩)「教会には理解されず」

前に私が書いた詩が出てきたので読みます。

教会には理解されず、

無教会には異端視されて、

荊棘の路を突き進み、

孤高の山路をよじ登り、

峻崖の細路を辿りつつ、

悠久の天道を我は往く。

嗚呼、偽善なるパリサイ人よ、

妬みと嫉みと陰口の徒よ。

この世の中の屑の屑、

我れ汝らと関わりなし。

我が主と共に十字架を負い、

大慈大悲の天道を

我れ悠然と進み往く。

悲しむ者と共に泣き、



悩める者と悩みをわかち、
求むる者の求めに応じ、
病める者の痛みを思い、
迷える者の道伴れとなり、
主の御光われを貫き、
主の御力わが身に溢れ、
自からこれらの人に
喜びと光とをわかち、
慰めと力を与える福音の証者たらん。
突き抜けし無者のこの道、
どん底の実存の態、
海ゆかばそこに友あり、
山往かばそこに人あり。
心ある人ぞひとなる。
我が胸に天つ陽ぞある。
壁もなく、石垣もなく、
わが胸は開かれてあり。
傷だらけ、八方破れ、
ひたすらに構える人は破れ去る、
己が構えに。
魂の砕けたる人、
罪に泣く情愛のひと、
思い遣りある真情のひと、
罪愆をことあげせぬ人、
義のために耐え忍ぶひと、
親しきはかかる人々。
武蔵野の遺れる民と
寺小屋の集会をもち、
御意の赴くままに
前進の一路を辿り、
門を叩けば開いて招き、
終始一貫、使徒的信仰を
御書のままに語り伝えて、
幕屋を張り幕屋を畳んで、



極もなく真理の旅を限りなく
荒野の野路を御国めざして
我れは往くなり。

この旅路に果たすべき大詩篇
わが心踊り、わが血潮湧き、
全身全霊火の玉と化す。

世の終末ほど遠からじ。

世紀末の様相は

社会と世界の諸現象に

膿の如く腫れ物の如く、

傷の如く癌の如く、

現れ出でて治癒切開の術もなく、

危機を孕みて爆発を待つ。

我れは生く、

キリストの啓示に、

ある詩篇の成就するまで。

御名のためのこの靈願を、

主よ、汝知りたもう。

主よ、御前に平伏し、

汝の碎けに我れは碎かれ、

汝が復活の突破の生命に

千苦万難を突破せん。

嗚呼、躍らしきこの希望。

嗚呼、雄々しかるこの現実。

使命のためには百寿をも突破して

福音の証とならん。

パトモスの孤島にありて

受けし黙示の音信を詩にもしたる

恩師の詩篇『羔の婚姻』は惜しむべし。

未完のままに残されてあり。

くすしきかなや、我が運命。

師の志を新たに継ぎて、

神の歴史の終末の

輝きの御国を歌はん。



昼も夜も読書に詩作に
粉骨碎身、研鑽錬磨。
時空を越えて霊界の霊想に耽り
黙示に与かり、
過去現在未来の三世、
地獄煉獄天国の三界、
これを直視し回顧し洞察すべし。
宇宙的キリストの御懐に我れは抱かれ、
神の歴史と神の御国と大宇宙をば
包摂する大聖霊に我れは抱かる。
我れと我が身は既に無し。
靈法冥利限りなく、
我れを捉えて天翔けらしめん。
諸々の宗教を撃って一丸、
あらゆる真理を抱いて溶かし、
円融無辺、遍照無限。
神よ、主よ、御霊の神よ、
この烈々たる魂を確かと捉え
自由に用い、
鍛えに鍛え、練りに練り、
天来の詩を御名の故、
書かしめたまえ、
成らしめたまえ。
我れは耐え抜き忍び抜き、
千苦万難を担い抜き、
悲願霊願祈りぬぎ、
御本願に即し奉らん。
この詩成就の暁に、
弦月は満月に円現すべし。
旭日は暁雲を突いて昇らん。
全天の星は楽を奏でん。
百花は山野に咲きみだれ、
千草は原野に乱舞せん。
百獸草原に踊り出で、



千鳥蒼窮に飛びて歌はん。
世人よ驚異の眼を見張り、
世界は瞠目驚嘆すべし。

我が国民は初めて知らん、
大和民族の真の旗手を、

武蔵野の隠れたる詩人を、
故里に棄てられし預言者を

大キリストの真の使徒を、
主キリストの福音の証者を。

内村・藤井の心を受けて突き抜ける
不屈の魂天童はここにあり。

無教会、幕屋の大方の者に
誤解され無視されたる

真理の無者はここにあり。
キリスト召団の反逆者たちに

棄てられし塵芥同然の
証人はここにあり！

わが主さま！

こういう詩が昨日出てきた。へえーこんなものを書いたか、と思った。まあ、私の気持の一端が現れている。こんなものを読んだりして申し訳ありません。私の話は論理的でないものですから。皆さんは、私の気合を分かってくださるからいいんですけれども。

● 歓喜のあぶら

ところで、イザヤ書の61章は有名なところです。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、¹ 俘囚にゆるしをつげ、² 縛められたるものに解放をつげ、³ エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、⁴ 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、⁵ 悲哀にかえて歓喜のあぶらを与え、⁶

「歓喜のあぶら」とは聖霊のこと。

うれいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。」(イザヤ61・1-3)



素晴らしい言葉だ。とにかくイザヤ書というのは全聖書の集約したような所です。全イザヤ書66章が全部そうです。旧約ではイザヤ書をよくお読みください。楽しいですから、新約と通じますから。

昔は「詩篇、詩篇」と言ったけれども、詩篇よりもイザヤ書です。イザヤ書、預言書とこの上からきている言葉ですから。詩篇は下からの祈りです。

とにかく、新約聖書は無駄がない。特に、福音書は大変なところだ。福音書を読んで、「分かるの、分からないの」

ではない。キリストの中に自分を投げ入れていたら、もう読んでいるうちに力がきてしまつてしょうがない。

そして、皆さん、さつき私がちよつと申し上げましたように、

「この集会は、楽しい所だ、喜びの溢れている所だ」

と、是非そうなりましょう。そういうつもりで、私は来年からいきますから。

「よし、それでいきます。そういう喜びの集会としていきましょう」

という方は申し込んでください。

一大決意で——いわゆる決意ではないけれども——そういう聖霊におけるところの念願をもつて進まなかつたら、いつまでたつたつて始まらないから。それは何も他と比較する必要はない。とにかく、ここはそういう所だ、ということだね。そして、なるべく活動もしていきたいと思います。女の方も婦人会みたいのを開いて大いにやってください。とにかく、積極的に進んでいきましょう。

●喜びと光の溢れた武蔵野幕屋

キリストみたい天国を現じていた人が、結局最後には棄てられてしまった。要するにユダヤ教の奴らです。キリストはいわゆる律法には逆らっていたから。安息日も守りはない。困っていた者があれば助けた。とにかく、あのユダヤ教というのは非常にこだわっている。だから、キリストは言い逆らいの徴にならざるを得なかつた。しかし、旧約の本当の隠れた精神は福音だつた。

「汝、殺すなかれ」

ではない。

「お前は殺人はしない」

ということ。へ、ブライ語は本当はそんなんです。「なかれ」ではない。

「われが汝の神であるから、お前は殺人なんかしない」

と、断定して信じて言っている神さまの言なんです。「殺すなかれ」ではない。「なかれ」というへブライ語は「アル」という字ですけれども、アルではない。「ロー」というのは「殺人はしない」という断定的な言葉なんです。だから、本当は律法ではない。隠れたる福音



だったんです。神さまはイスラエルの民を信じてかかっている。それを律法にしてみましたのは歴史的なユダヤ教の間違いなんです。

「**汝、わが面かおの前に何ものをも神とすべからず**」
ではない。

「お前にとつては、私の他には神さまはないねえ」
という言い方なんです。即ち、

「お前イスラエルと私の関係は一对一の人格関係なんだぞ」
ということですよ。「すべからず」ではない。みんなこれを間違っってしまった。そういうことをはつきり言わないんだね、みんな。全部、隠れたる福音です、特に預言者は。それがいわゆるユダヤ教になってしまったからダメになってしまった。律法の宗教になってしまったから。アブラハムはそうではなかった、アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフのあたりは。モーセだってそうなんです。律法ではなく、断定的なものの言い方をしていません、本当は。「すべし、すべからず」ではない。「そうだ、こうだ」という。

「お前たちはよく勉強するね、だから、試験はしないよ」
というのが本当の学校なんだ。

「君たちはカンニングはしない。私は監督しない」
と言って、私は東大で一遍、試験場から出たことがある。ちゃんと、みんな受験したです。

「私は監督なんかしたくないんだ」
と。人を信じ愛してかかっていけば、その世界が展開していく。疑ったらダメ。

先程申し上げたとおり、そういう喜びと光の溢れた、そういう武蔵野幕屋。私はあなた方を信じます。どうぞ、そうやって一緒にいきましょ、来年から。

「何かこの集会は明るいなあ、楽しいなあ」
と。くすぶったような顔をしてたらダメだよ。はつきり私はそれを信じて、皆さんと行くと思う。

「よし、それで行きます」
というなら、ハガキで今年中に申し込んでください。そうしたら、その気合で行きますから。それは「聖霊の維新」といいます。御霊の維新。聖霊の愛です。聖霊は愛の霊ですから。愛と光。もう、来年からこの集会はガラリ変わる。私はそのことを期待しております。必ずなる。それでなくて、何の聖霊だと。何の十字架だと。そういうことで、楽しく勇ましく進んで行きたいと思っております。ありがとうございます。

